様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３１０９

研究課題名（和文）英米探偵小説における隠れた言葉遊びの使用法

研究課題名（英文）The Role of Hidden Wordplay in Anglo-American Detective Fiction

研究代表者
衣川　将介（Kinugawa, Shosuke）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：１０７７９４２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、英米探偵小説における隠れた言葉遊びの役割を明らかにすることである。成果としては、まず研究の土台となる資料の収集・整理を行い、重点的な分析対象となるテキストの選定を行った。また、研究対象作家の一人であるMark Twainの探偵小説と言葉遊びの関係性の一端を明らかにした論文を国際的なTwain研究専門誌に出版した。論文がTwain研究をリードするジャーナルに掲載されたことは、申請者の研究がTwain研究にとって価値のあるものと認められた証左である。また、当初は想定していなかった研究対象とすべき作品群を見つけることができたことも重要な成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は英米探偵小説における言葉遊びの役割を本格的に解明しようする初の試みであり、探偵小説の新たな読み方を提示する研究である。また、探偵小説というジャンルにおける特定の技法の研究や、分析の対象とする作家のそれぞれの研究にも新たな知見をもたらす。さらに、英米文学全般における言葉遊びの研究への貢献も期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to understand the role of hidden wordplay in Anglo-American detective fiction. Toward this end, I began by collecting and organizing primary and secondary sources that serve as the basis for my research, mainly detective fiction, crime fiction, criticism concerning these genres and relevant scholarship on the topics of race, gender, wordplay and cryptography. I then selected fictional works from among the collected materials that will serve as the primary subject of analysis for the research project. Furthermore, I published an article elucidating an aspect of the relationship between Twain's detective fiction and wordplay in an international journal dedicated to Twain studies. The fact that the article was published in a leading Twain research journal is evidence that research coming out of this project has been recognized as meaningful. Moreover, I was able to find additional relevant fictional works that broaden the scope of the project.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：英米文学　探偵小説　犯罪文学　言葉遊び　Mark Twain　Agatha Christie　Charles Willeford　Sara Paretsky

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、米国作家 Mark Twain の研究から派生したプロジェクトである。Twain 文学における言葉遊びの役割を研究する過程で、Twain の探偵小説も研究の対象とするようになった。そしてトウェインの探偵小説を研究するために英米の探偵小説と先行研究を調査していく過程で、言葉遊びが英米探偵小説全般に使用されていること、そしてそうした言葉遊びの役割に関する研究がほとんど存在しないことを知った。そこで、Twain だけでなく英米探偵小説全般における言葉遊びの役割に研究対象を広げることにしたことが本研究課題の発端である。

そもそも英米探偵小説研究の歴史はまだ比較的浅く、学術的研究の対象となりはじめたのは 1970 年代中庸のことである。1980 年代に研究が本格化し、1990 年代以降は文学研究の対象として定着。米国人作家 Edgar Allan Poe や英国人作家 Arthur Conan Doyle に代表される知名度の高い作家の研究や、「ハードボイルド」や「ノワール」といったサブジャンルに対象を絞った研究が数多く出版されている。また、ジャンル全体を見渡す通史も定期的に発表されている。

目覚ましい発展を見せる英米探偵小説研究だが、特定の作品の詳細な分析に基づく研究はまだ少ない。Poe とアルゼンチン人作家 Jorge Luis Borges の短編に焦点を絞った John T. Irwin による研究書（文献①)のような例外もあるが、全体としては個別作品の精読を主眼とする研究は稀である。個別の作品を詳細に分析しないという傾向は、作品の単語・文字レベルでの細かい事象にあまり注意を払わないという傾向としても現れている。その一例として、言葉遊びに関する研究が極めて少ないという特徴を挙げることができる。ここでいう「言葉遊び」とは、日本語で「語呂合わせ」、英語で“pun”と呼ばれる、同一ないし類似の音を持つ単語を組み合わせて使用する修辞的技法のことである。

英米の探偵小説で使用される言葉遊びは大きく分けて二種類ある。一つは作中で明示されているもの。もう一つは、読者からいわば「隠された」言葉遊びである。明示される言葉遊びの多くは事件解決のヒントとして物語に導入される。例えば英国人作家 Agatha Christie の短編“Strange Jest”（1941）では、“gammon”（豚の燻製）と“spinach”（ほうれん草）を使った料理のレシピが「ナンセンス」を意味する“gammon and spinach”という慣用句との語呂合わせであることに気づくことが、謎解きの鍵となっている。明示された言葉遊びは最終的に探偵が作中で解説を披露することがほとんどであるため、読者がそれを見落とす心配は少ない。対して隠れた言葉遊びは、語り手や登場人物による言及が無いため、読者が自ら発見しなければならない場合が多い。隠れた言葉遊びは、最終的に探偵が解明するプロット上の謎を読者が探偵に先立って（あるいは一緒に）解くためのヒントとして機能する場合もある。同時に、作品の哲学的・政治的なメッセージを読み解くためのヒントとしての役割を担うこともある。そのため、隠れた言葉遊びに気づくか否かで作品の解釈が大きく変わることもある。

つまり、英米探偵小説における隠れた言葉遊びという要素は、個別の小説の解釈を大きく左右する可能性を持つにも関わらず、ほとんど研究されていないという状況であった。このギャップに研究プロジェクトとしてのポテンシャルを感じたことが、本研究課題を立案した背景と動機である。

２．研究の目的

本研究の申請時の目的は、英米探偵小説における隠れた言葉遊びの役割を明らかにすることである。役割の解明は三つの視点からの分析を通して行われる。まず英米探偵小説に定番の趣向として知られる「フェアプレイ」と呼ばれる技法における言葉遊びの使用法の把握。次に人種問題を描くツールとしての言葉遊びの役割の把握。そしてフェミニスト探偵小説における言葉遊びの役割の把握である。英米探偵小説における言葉遊びの研究は極めて少なく、隠れた言葉遊びについてはその存在自体があまり認知されていない。本研究は、隠れた言葉遊びが様々な英米探偵小説の中で重要な役割を担っていることを示すことで、英米探偵小説の新たな形式面での特徴を提示することを目的としている。

申請時に想定していた本研究課題の学術的独自性は、以下の四点である：

(1) 探偵小説研究全般への貢献：本研究は英米探偵小説における言葉遊びの役割を本格的に解明しようする初の試みであり、探偵小説の新たな読み方を提示する研究である。隠れた言葉遊びは Poe と少数のポストモダン探偵小説と呼ばれるサブジャンルの作品に限定的な要素としてみなされてきたため、技法としてほとんど認知されていない。しかし、本研究は隠れた言葉遊びがより多くの探偵小説作家の作品で使用されていることを示唆するものである。これまで「面白いギミック」程度に考えられていた言葉遊びが、実は形式面でも主題面でも重要な特徴であることを示すことで、ジャンル研究に新たな批評的視点を提供することを目指す。また、本研究の成果は、「隠れた言葉遊びに気を配る」という形で研究者だけでなく一般読者の読書行為にも容易に応用できるものである。「言葉遊びが隠れているかもしれない」という可能性を念頭におくだけでも、探偵小説の読み方は大きく変わる。グローバルな読者層を持つジャンルの読み方を変えるという意味で、本研究はインパクトの裾野が広い研究といえる。

(2) フェアプレイ研究への貢献：フェアプレイとは、作者が物語内の事件解決のために必要なヒントを読者にもアクセスできる形で作中に忍ばせることで、探偵だけでなく読者にも謎解きを可能にする趣向のことである。探偵小説における定番の技法だが、その手段としての隠れた言葉遊びの使用はあまり確認されていない。本研究では、Christie 作品全体を射程に新たな隠れた言葉遊びのフェアプレイ的使用法を提示する。

(3) 作家研究への貢献：本研究は、Christie と Twain に加え米国人作家 Charles Willeford と Sara Paretsky を含めた四名の作家の作品を主な対象とする。この四名の作家に関する先行研究には言葉遊びに関する考察がほとんど無い。本研究は、四名の作品を「隠れた言葉遊びの役割」という新たなレンズを通して分析することで、それぞれの作家の研究史に独自の貢献を行うことを目指している。特に Willeford と Paretsky は作品の比較的高い認知度に対して先行研究がまだ少ないため、先駆的な研究になることが期待できる。

(4) 英米文学全般における言葉遊び研究への貢献：英米探偵小説における隠れた言葉遊びの新たな使用例と使用法を提示することで、英米文学全般における言葉遊びの研究にも貢献する。

３．研究の方法

本研究は、英米探偵小説における隠れた言葉遊びの役割をフェアプレイ、人種問題、フェミニズムという三つの視点から考察するという手法を採用している。

まず Christie の探偵小説作品全般における隠れた言葉遊びのフェアプレイ的な使用法を把握する。フェアプレイのヒントには様々な種類があるが、隠れた言葉遊びをヒントとする作品については Irwin が Poe の短編“The Murders in the Rue Morgue”（1840） における使用例を指摘した考察（文献①）を除いてほぼ確認されていない。本研究では Christie 作品全体における隠れた言葉遊びのフェアプレイ的使用の諸相を明らかにすることを目指している。

また、隠れた言葉遊びを人種問題の批判的表象のために使用している作品も研究対象とする。具体的には Twain の小説 *Pudd’nhead Wilson* (1894) と Willeford の小説 *Pick-Up* (1955) である。*Pudd’nhead Wilson* は 19 世紀米国南部における人種差別を批判的に描いた作品として広く知られているが、その批判における言葉遊びの役割については考察がない。*Pick-Up* は、作品の最後の一行まで主人公が黒人であることを明言しないことで、主人公が「当然」白人であると思い込んだ読者の潜在的な差別意識をあぶり出すという趣向の小説である。申請者はこの「思い込み」を演出するために隠れた言葉遊びが使用されていると推察しており、本研究ではその仕組みを解明することを目標としている。

さらにフェミニスト的主張を織り込む手段として隠れた言葉遊びを用いている作品も研究対象とする。具体的には Paretsky の V. I. Warshawski シリーズ、特に小説 *Blood Shot* (1988) を主たる研究対象とする。Paretsky は「フェミニスト探偵小説」と呼ばれるサブ・ジャンルの旗手であり、その作品が現代社会における家父長制への批判を表現していることは広く知られている。しかし、そうした主張を作品の中で表象するにあたって隠れた言葉遊びが重要な役割を担っていることは指摘されていない。本研究では、*Blood Shot* を中心に Warshawski シリーズ全体におけるフェミニスト的主題と隠れた言葉遊びの関係性を明らかにすることを目指している。

テキストの具体的な分析の方法としては、言葉遊びが単語・文字レベルで展開される技法であるため、基本的には作品テキストの精読が軸となる。まず対象作品から隠れた言葉遊びの例を収集する。次に収集した言葉遊びの各作品内での役割を解明していく。その際、探偵小説に関する先行研究を重点的に参照していく。特にジャンル史、対象作家の作家論、ジャンル論、フェアプレイに関する研究、探偵小説における人種問題の表象に関する研究、フェミニスト探偵小説の研究を参照し、本研究の研究史上の位置付けを明確にしていく。また英米文学全般における言葉遊びの先行研究も参照枠として使用する。探偵小説のプロットが常に 「謎解き」を軸としていることから、特に言葉遊びを使用した “riddle”等の「なぞなぞ」に関する研究を応用する。また、隠れた言葉遊びを使用した修辞法や書記法、具体的にはアレゴリーや暗号書記法（cryptography）に関する先行研究も参考にする。

４．研究成果

初年度は、Christie のフィクション、ノンフィクション、ノート等の一次資料及び本研究に必要な Christie 研究書の一部を収集し、内容の精査を開始した。同時に探偵小説全般に関する研究の収集と整理も開始した。また、収集した Christie 関連の資料と探偵小説全般に関する研究資料を参照枠に、Christie の探偵小説における言葉遊びのフェアプレイ的使用法の分析を開始した。小説の分析という面では、特に Christie の小説 *Cards on the Table* (1936)が彼女の探偵小説における隠れた言葉遊びの役割を理解するために重要であると分かったことが大きな成果である。

2 年目は、Willeford のフィクションとノンフィクション及び Willeford に関する研究書の一部を収集し、内容の精査を開始した。同時に、Twain 研究の関連資料も一部収集し、内容の精査を開始した。さらに、米国における人種問題の諸相と歴史に関する資料の一部収集も行った。収集した Willeford 関連資料と人種問題に関する資料を参照枠に、Willeford の *Pick-up* における人種問題の表象と言葉遊びの関連性の分析を開始した。その過程において、小説における絵画

のモチーフの重要性が明らかになってきたことが、*Pick-up* 読解という点においては最大の成果である。Willeford の著作物における絵画への言及やモダン・アートの研究を参照しつつ、*Pick-up* における人種問題、言葉遊び、絵画の関連性の分析に着手した。また、初年度に主たる資料収集を行った Christie と探偵小説関連の資料も追加で収集した。フェミニズム及びジェンダー・セクシュアリティー関連の資料収集にも着手した。

3 年目は、Paretsky のフィクションとノンフィクション及び Paretsky に関する研究書の一部を収集し、内容の精査を開始した。また、収集した Paretsky 関連資料の整理・分析を開始した。また、前年度に開始した *Pick-up* の分析を継続して行った。同時に、*Pudd'nhead Wilson* における言葉遊びと人種問題の表象に関する分析も継続。1 年目に着手した Christie の作品研究も並行して進めることができた。探偵小説関連資料、言葉遊び関連資料、フェミニズム及びジェンダー・セクシュアリティー関連の資料、人種問題に関する資料の収集もさらに進めた。

最終年度は、英米における人種問題に関する研究資料の収集と分析に注力した。特に 19 世紀米国における「人種の科学」に関する資料の収集に力を入れた。さらに Twain 研究の専門誌に Twain の探偵小説と言葉遊びに関する論文を出版した。また、研究をまとめる準備として、暫定的ではあるが、集中的に分析を行う作品群を選定した。

各年度の成果をまとめると、大きく４つの成果を上げることができたと言える：

(1) **研究の土台となる必要な資料の収集・整理**：資料の多くは海外からの取り寄せであったためコロナ禍による物流停滞の影響が大きかったものの、資料収集はほぼ完了できた。

(2) **集中的な分析の対象となる作品の選定**：収集した作品や資料の中から「英米探偵小説における隠れた言葉遊びの使用法を解明する」という本研究課題の目的に適したテキストの選定を行った。2019 年から 2022 年に渡り、毎年１名の作家の作品と関連資料を集中的に分析する形でここまで研究を進め、研究の軸となる作品特定の目途を立てることができた。

(3) **論文出版**：Twain の探偵小説と言葉遊びの関係性の一端を説明した論文を出版した。ジャーナル論文としては異例の約 14,000 ワードという長文がトウェイン研究をリードする米国のトウェイン研究専門誌に掲載されたことは、ひとまず筆者の研究がトウェイン研究にとって価値のあるものと認められた証左であると考えられる。

(4) **研究課題申請時には予想していなかった事象の発見**：

①Twain の探偵小説と人種問題の交差点を探る過程で、人種問題を主題とした作品の一部が 19 世紀前半から中葉にかけて隆盛を見たいわゆる 「人種の科学」（science of race）と深く関わっていることが見えてきた。同時に、Twain 文学に対する「人種の科学」の影響に関する研究はほとんど存在しないことも分かった。この発見は、Twain の探偵小説と人種問題の関連性の理解を進める一助になるだけでなく、「Twain 文学と人種」というより広い主題の理解の促進にも繋がる可能性を持つ視点である。

②Willeford 文学の研究を進める過程で見えてきたのは、Willeford の作品と絵画の密接な関係である。Willeford の犯罪文学作品には度々絵画が登場するが、それらは単なるプロットや舞台装置上の役割だけでなく、作品の哲学的・政治的な主題を理解するための鍵となっていることが分かってきた。絵画が Willeford 犯罪文学を読み解くための重要な要素であることを発見できたことは、今後 Willeford の研究を進めるにあたって重要な意味を持つ。

③対象作品の増加：様々な英米探偵小説を読む過程で、隠れた言葉遊びが重要な役割を果たす作品群が新たに見つかった。米国人作家 Walter Abish の作品である。特に小説 *How German Is It?* (1980) はいわゆるポストモダン探偵小説として位置づけられる作品であり、集中的な分析を行う作品に含める予定である。研究対象として検討すべき作家や作品が増えたことは重要な成果である。

今後は、対象作品における言葉遊びの役割の分析をさらに進めていく形でそれぞれの作家に関する作家論を完成させる予定である。まずは既に論文を出版している Twain の探偵小説における言葉遊びの役割という主題に焦点を絞った単著の執筆からはじめ、次いで Willeford 論に着手したい。そして最終的には、Christie、Paretsky、Abish らの作品を軸に、英米の探偵小説（ないし犯罪文学）全体における言葉遊びの役割に関する概説も作成する予定である。研究成果を論文や英文単著として出版するという申請時の目標に変更はない。

＜参考文献＞

① Irwin, John T. *The Mystery to a Solution: Poe, Borges and the Analytical Detective Story*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1994.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Shosuke Kinugawa	４．巻 60
２．論文標題 Wordplay and Encoded Writing in Mark Twain's Literature	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Mark Twain Journal	６．最初と最後の頁 87-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Research Map 衣川将介 Shosuke Kinugawa
https://researchmap.jp/shosukekinugawa

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関